

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 特 許 公 報(B2)

(11) 特許番号

特許第3684257号
(P3684257)

(45) 発行日 平成17年8月17日(2005.8.17)

(24) 登録日 平成17年6月3日(2005.6.3)

(51) Int.Cl.⁷

G06F 17/60

F I

G06F 17/60 154

請求項の数 1 (全 9 頁)

(21) 出願番号	特願平7-241380	(73) 特許権者	000005108
(22) 出願日	平成7年9月20日(1995.9.20)		株式会社日立製作所
(65) 公開番号	特開平9-81644		東京都千代田区丸の内一丁目6番6号
(43) 公開日	平成9年3月28日(1997.3.28)	(74) 代理人	100068504
審査請求日	平成14年8月7日(2002.8.7)		弁理士 小川 勝男
		(74) 代理人	100061893
			弁理士 高橋 明夫
		(72) 発明者	横井 慎一
			東京都江東区新砂一丁目6番27号 株式
			会社日立製作所公共情報事業部内
		(72) 発明者	水野 英敏
			東京都江東区新砂一丁目6番27号 株式
			会社日立製作所公共情報事業部内
		審査官	金子 幸一

最終頁に続く

(54) 【発明の名称】 戸籍記載文作成装置

(57) 【特許請求の範囲】

【請求項 1】

入力された戸籍に関する情報を事件ごと、身分事項ごとに項分けして記憶する記憶手段と、

事件名と少なくとも1つの該身分事項との組み合わせに対応して該事件の移記を行うか否か、担当者の判断によるかの区分を設定する移記判定テーブル手段と、

裁判での判例などの判定の根拠となる判定例を格納する判定履歴テーブルと、

該記憶手段に格納された事件名と少なくとも1つの該身分事項をキーとして該移記判定テーブルを検索し対応する該区分をとり出す第1の処理手段と、

事件名と少なくとも1つの該身分事項との組み合わせに対応して戸籍記載文のパターンを格納する記載パターンテーブル手段と、

判定された該区分に基づいて該記憶手段中から移記が必要な事件を抽出し、抽出した事件について事件名と少なくとも1つの身分事項とに基づいて該記載パターンテーブルを検索し対応する記載文をとり出して出力する第2の処理手段と、

該区分が担当者の判断によるものである場合に、該判定履歴テーブルを検索し、過去の判定例を表示し、担当者による判定を促す第3の処理手段とを有することを特徴とする戸籍記載文作成装置。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【産業上の利用分野】

10

20

本発明は、戸籍情報を処理する情報処理装置に係わり、特に身分事項を項分け記載している新しい戸籍簿を入力して従来の戸籍記載文を作成して出力する戸籍記載文作成装置に関する。

【0002】

【従来の技術】

戸籍簿を管理する方式としては、戸籍原本をB4横の形式の用紙で保管する従来から行われている方式と、戸籍簿に記載する内容を項目化してデータベース化する新しい方式とがある。

【0003】

図2は、従来の戸籍簿の事例を示す図である。

10

【0004】

図3は、データベース化された戸籍簿の事例を示す図である。データベース化されている戸籍事務システムを以下新戸籍システムと呼ぶこととする。図3に示すように、戸籍簿の内容は「出生」「婚姻」などの事件名を筆頭にして[出生日][届出人]などの身分事項が項目化されている。そして新戸籍システムで作成される戸籍簿はA4縦の用紙に印字される。

【0005】

新戸籍システムが導入されている自治体から未導入の自治体への転籍を行う場合、転籍先の自治体には新戸籍システムによって出力されたA4縦の横書きの戸籍簿が提出されるので、提出された戸籍簿を基にしてB4横の縦書きの戸籍記載文を作成するとともに、戸籍簿に記載されている内容を転籍後の戸籍原本に記載する必要があるかどうか戸籍法等に照らし合わせて判断する改製作業を行う必要がある。

20

【0006】

従来の戸籍記載文を作成する方法としては、特開平5-120269号公報に記載の技術がある。これは戸籍事務の知識の乏しい職員でも戸籍記載文を作成できるようにしたもので、予め戸籍記載文例を格納している戸籍記載文例ファイルを持ち、戸籍届出書の内容が入力された際にその戸籍届出書の記載内容を解析し、戸籍記載文例ファイルから必要な戸籍記載文例を選択するとともに戸籍記載項目の抽出を行い、戸籍記載文例と戸籍届出書の項目とを編集し、戸籍記載文を作成するものである。

【0007】

30

【発明が解決しようとする課題】

上記従来技術は、戸籍記載文例と戸籍届出書の項目とを編集して戸籍記載文を作成するものであるが、新戸籍システムが出力する身分事項が項目化されている戸籍簿のデータを戸籍記載文に変換する技術については何も示唆していない。また上記の改製作業については考慮されていない。

【0008】

本発明の目的は、届出書とともに新戸籍システムの出力する項目化された記載事項から従来行われている戸籍記載文を作成する戸籍記載文作成装置を提供することにある。

【0009】

また本発明の他の目的は、改製処理を行ってから戸籍記載文を作成する戸籍記載文作成装置を提供することにある。

40

【0010】

【課題を解決するための手段】

本発明は、届出書と新戸籍システムで作成された戸籍簿を入力して事件ごと、身分事項ごとに分けて記憶し、記憶された事件名と少なくとも1つの身分事項に基づいて記載パターンテーブルを検索し、対応する記載文をとり出して出力する戸籍記載文作成装置を特徴とする。ここで記載パターンテーブルは事件名と少なくとも1つの身分事項との組み合わせに対応して戸籍記載文のパターンを格納する。

【0011】

また本発明は、事件名と少なくとも1つの身分事項との組み合わせに対応して事件の移記

50

を行うか否かの区分を設定する移記判定テーブルを設け、記憶された事件名と少なくとも1つの身分事項をキーとしてこの移記判定テーブルを検索して対応する区分をとり出し、移記が必要な事件を抽出して上記のように戸籍記載文を作成する戸籍記載文作成装置を特徴とする。

【0012】

【作用】

記載パターンテーブルは各事件種別について出現する身分事項のすべての順列組合わせに対応して戸籍記載文を設定するので、入力される事件と身分事項のリストとによって該当する記載文が一意に決定し、これを出力することができる。また移記判定テーブルも同様に事件名と出現する身分事項のすべての順列組合わせに対応して区分を設定するので、戸籍記載文作成装置はこの区分に応じて事件の移記についての判断をすることができる。

10

【0013】

【実施例】

以下本発明の一実施例の戸籍記載文作成装置について図面を用いて詳細に説明する。装置の説明に入る前に図2及び図3を用いて戸籍簿のデータ形式について説明する。

【0014】

図2は、従来のB4縦書きの戸籍簿の事例を示す図である。事例に示すように「婚姻」「出生」等の事柄について記載した事件文が複数集まり戸籍記載文(戸籍文)を構成する。

すなわち

戸籍文＝「事件文」「事件文」・・・・・・「事件文」

20

である。図2の事例によれば、次に示すように戸籍文は2つの事件文から構成される。

戸籍文＝「昭和式年式月式日東京都江東区で出生同月五日父届出入籍」

「昭和式拾年拾壹月参日青空花子と婚姻届出東京都江東区新砂一丁目六番山田一太郎戸籍から入籍」

また事件文は「出生日」「届出日」等の身分事項と、「で出生」「届出入籍」等の特徴データとから構成される。事例の最初の事件文は次のような構成となる。

事件文＝「昭和式年式月式日」「東京都江東区」「で出生」「同月五日」

「父」「届出入籍」

＝「身分事項」「身分事項」「特徴データ」「身分事項」

30

「身分事項」「特徴データ」

上記事件文の特徴データは「で出生」「届出入籍」である。

【0015】

図3は、A4横書きの新しい戸籍簿の事例を示す図である。事例に示すように例えば「出生」事件は、事件名「出生」を筆頭として、

〔出生日〕昭和2年2月2日

〔出生地〕東京都江東区

〔届出日〕昭和2年2月5日

〔届出人〕父

40

のように各身分事項のみが記載される形式である。従って従来の戸籍の事件文で用いられてきた「で出生」「届出入籍」などの特徴データは存在しない。

【0016】

図1は、本実施例の戸籍記載文作成装置の構成を示す図である。入力部11は届出書及び新しい戸籍システムから出力された戸籍簿の内容を入力するキーボード等の入力装置である。入力データ記憶部12は入力された戸籍データを格納する記憶手段である。移記判定テーブル13は各事件ごとに出力する戸籍簿に移記するか否かを示すテーブル、判定履歴テーブル14は移記判定テーブル13では判定できない事件について業務担当者が過去に行った判断の履歴を格納するテーブルである。表示部18は過去の判定例と判断基準を表示する表示装置である。改製処理部3は、入力部11から入力された戸籍データを編集し

50

た後入力データ記憶部 12 に格納し、入力データ記憶部 12 に格納される各事件について移記判定テーブル 13 を参照して移記処理を行うか否かを判定し、その結果を入力データ記憶部 12 に書き込む処理部である。移記判定テーブル 13 では判定できない事件については、改製処理部 3 は判定履歴テーブル 14 中の該当する判定例を表示部 18 に表示し、業務担当者が行った判断に従ってその結果を入力データ記憶部 12 に書き込む。記載パターンテーブル 15 は各事件ごとに記載文のパターンを格納するテーブルである。記載文記憶部 16 は作成された記載文を格納する記憶手段、印刷部 17 は作成された記載文を印刷する装置である。記載文作成部 4 は、入力データ記憶部 12 から戸籍データを入力して移記処理が必要な事件のみを抽出し、記載パターンテーブル 15 を参照して戸籍データを従来の戸籍記載文の形式に変換して作成された記載文を表示部 18 上に表示するとともに記載文記憶部 16 に格納し、印刷部 17 上の用紙に印刷出力する。本戸籍記載文作成装置はパソコン、ワークステーションを含む情報処理装置によって実現され得る。改製処理部 3 及び記載文作成部 4 はこの情報処理装置の記憶装置に格納されるプログラムを実行することによって実現される。また入力データ記憶部 12、移記判定テーブル 13、判定履歴テーブル 14、記載パターンテーブル 15 及び記載文記憶部 16 はこの情報処理装置の記憶装置に格納されるファイル又はテーブルである。入力部 11 及び表示部 18 はこの情報処理装置に接続される入出力装置である。

10

【0017】

図 4 は、入力データ記憶部 12 に格納される戸籍データのデータ形式を示す図である。個人番号は各個人に付与された識別子であり、事件名 51 は出生、婚姻、離婚、認知などの事件種別を示す名称である。身分事項内容 52 は、出生日、出生地、婚姻日、認知日、配偶者等の身分事項と各身分事項に対応して入力された内容（年月日、住所、配偶者など図で A、B、C・・・で示される部分）とから構成され、各身分事項ごとに項分けして記憶される。53 は事件名と身分事項とから判定される移記を行うか否かを示す移記処理区分であり、移記必要と判断された場合は '1'、移記不要と判断された場合は '0' が格納されるフィールドである。図 4 に示すように入力された情報は事件ごとに 1 レコードの情報として格納される。

20

【0018】

図 5 は、移記判定テーブル 13 のデータ構成を示す図である。事件名 61 は出生、婚姻、離婚、認知等の事件種別を示す名称である。身分事項内容 62 は事件に対応する少なくとも 1 つの身分事項を含む身分事項の組み合わせのリストである。移記処理区分 63 は事件名 61 と身分事項 62 とから成る身分事項のパターンをキーとして、このキーから判断される区分であり、'1' は移記必要、'0' は移記不要を示し、'△' は業務担当者による判断が必要なことを示す。処理判断基準 64 は一般的な処理判定の基準を示すものであり、特に業務担当者による判断が必要な記載事項のパターンについて参照される。なお事件名 61 が同じ「認知」であっても身分事項内容 62 が被認知者（子）に関するものか認知者（父親）に関するものの違いにより移記処理区分 63 は異なる。このように移記判定テーブル 13 には事件名と身分事項のリストから成る考えられるすべてのパターンとその移記処理区分 63 とが登録されている。

30

【0019】

判定履歴テーブル 14 のデータ構成は図示していないが、移記判定テーブル 13 のうち業務担当者による判断が必要な身分事項のパターンについて事件名 61 及び身分事項内容 62 とこのパターンに対応する裁判の判例、参考文献など判定の参考になる事例が判定例として登録されている。

40

【0020】

図 6 は、改製処理部 3 の処理の流れを示すフローチャートである。改製処理部 3 は入力部 11 から戸籍データを入力して、図 4 に示すように各事件ごとのデータを 1 レコードとして入力データ記憶部 12 に格納する（ステップ 31）。装置は以下の改製処理を 1 戸籍ずつ行うため、例えば婚姻、養子縁組等の場合のように入力された戸籍が複数である場合、改製処理部 3 は入力されたすべての戸籍を表示部 18 に一覧表示する（ステップ 32）。

50

一覧として表示した戸籍の中から入力部 1 1 を介して改製処理を行う戸籍が 1 つ選択されると、改製処理部 3 は選択された戸籍について入力データ記憶部 1 2 を参照して 1 レコードずつ身分事項内容 5 2 から身分事項名を抽出し、事件名 5 1 と身分事項名のリストをキーとして移記判定テーブル 1 3 を検索し、対応する移記処理区分 6 3 を取り出す（ステップ 3 3）。その結果、移記が必要であれば入力データ記憶部 1 2 上の移記処理区分 5 3 に ' 1 ' をセットし、移記が不要であれば移記処理区分 5 3 に ' 0 ' をセットし、人による判断が必要であれば移記処理区分 5 3 に ' △ ' をセットする（ステップ 3 4）。例えば「出生」事件はその移記処理区分 6 3 が ' 1 ' となっているため、対応する移記処理区分 5 3 に ' 1 '（移記必要）を格納する。このようにして移記判定テーブル 1 3 の移記処理区分 6 3 に従って当該戸籍の各事件のレコードについて移記判断を行い、移記処理区分 5 3 にその結果を格納する。1 戸籍についての審査が終了したとき、入力された事件名、身分事項内容及び対応する移記処理区分を表示部 1 8 上に表示する（ステップ 3 5）。移記処理区分 5 3 に人による判断が必要と区分されたレコードについては、その事件名 5 1 と身分事項内容 5 2 から抽出された身分事項名のリストをキーとして移記判定テーブル 1 3 と判定履歴テーブル 1 4 とを検索し、過去の判定例と処理判断基準 6 4 を表示部 1 8 に表示する（ステップ 3 6）。表示された判定例と判断基準を基にして業務担当者が入力部 1 1 を介して移記処理区分 5 3 を ' △ ' から ' 1 ' 又は ' 0 ' に変更する（ステップ 3 7）。上記のようにして 1 戸籍についての改製処理が終了したとき、残りの戸籍が入力されていればステップ 3 2 に戻って上記処理を繰り返し、入力戸籍がなくなれば処理を終了する。

10

【 0 0 2 1 】

20

図 7 は、記載パターンテーブル 1 5 のデータ形式を示す図である。記載パターンテーブル 1 5 は、「出生」など事件種別 7 1 ごとに分かれており、各事件種別 7 1 について複数のパターンに分かれており、出現する身分事項名のすべての順列組合わせのパターンを格納する。例えば「出生」事件のパターン 1 では、身分事項が「出生日」「出生地」「届出日」「届出人」の 4 つであり、戸籍記載文にするために必要な特徴データは「で出生」「届出入籍」の 2 つである。そして戸籍記載文の記載パターンは、これらの身分事項と特徴データの組合わせを登録する。パターン 1 の例では、「出生日」「出生地」「で出生」「届出日」「届出人」「届出入籍」の順番で登録されている。

【 0 0 2 2 】

図 8 は、記載文作成部 4 の処理の流れを示すフローチャートである。記載文作成部 4 は入力データ記憶部 1 2 に格納するレコードのうち移記処理区分 5 3 が ' 1 ' となっている最初のレコードを抽出して読み込む（ステップ 4 1）。次に記載パターンテーブル 1 5 を検索して入力したレコードと記載パターンテーブル 1 5 中のパターンデータとのマッチング処理を行う（ステップ 4 2）。具体的には事件名 5 1 をキーとして事件種別 7 1 を特定し、特定した事件種別のパターン 1, 2・・・に対して身分事項内容 5 2 中の身分事項名と記載パターンテーブル 1 5 中の身分事項名とのマッチング処理を行って記載パターンを特定する。次に特定されたパターンの記載パターンに従って身分事項内容 5 2 を戸籍記載文の形式に展開する（ステップ 4 3）。以下に戸籍記載文の展開例を示す。

30

入力データ記憶部の内容：[出生日] 昭和 2 年 2 月 2 日

[出生地] 東京都江東区

[届出日] 昭和 2 年 2 月 5 日

[届出人] 父

記載パターン：（出生日）（出生地）「で出生」（届出日）（届出人）

「届出入籍」

40

この記載パターンで「で出生」「届出入籍」は特徴データであり、そのままの形で記載文に展開される。

記載文：昭和 2 年 2 月 2 日東京都江東区で出生昭和 2 年 2 月 5 日父届出入籍次に記載文作

50

成部４は決められたルールに従い記載文を編集する（ステップ４４）。例えば数字の「２月」を「弐月」に変更したり、誕生日と届出日の年と月が同じであれば「同月五日」に変更する。編集が済んだ記載文を表示部１８に表示し（ステップ４５）、記載文記憶部１６に１記載文１レコードの形式で格納する（ステップ４６）。戸籍原本の保管をするときには、印刷部１７上の戸籍用紙に記載文の内容を印刷する（ステップ４７）。入力データ記憶部１２中に残りのレコードが格納されていれば、ステップ４１に戻って上記処理を繰り返す。残りレコードがなくなったとき処理を終了する。

【００２３】

なおステップ４１において、入力する入力データ記憶部１２中のレコードはすべて移記が必要なレコードとし、移記不要なレコードをあらかじめ削除しておいてもよい。

10

【００２４】

【発明の効果】

本発明によれば、記載パターンテーブルによって入力される事件と身分事項のリストにマッチする戸籍記載文を出力することができるので、新戸籍システムが出力する項目化された記載事項から自動的に従来の戸籍記載文を作成することができる。

【００２５】

また本発明によれば、移記判定テーブルによって入力された事件の移記をするか否かの判定をすることができるので、移記が必要な事件についてのみ戸籍記載文を作成することができ、改製処理と記載文作成処理とを効率的に行うことができる。

【図面の簡単な説明】

20

【図１】実施例の戸籍記載文作成装置の構成を示す図である。

【図２】従来の戸籍簿の一例を示す図である。

【図３】新戸籍システムによって作成された項目化されている戸籍簿の一例を示す図である。

【図４】入力データ記憶部１２に格納される戸籍データのデータ形式を示す図である。

【図５】移記判定テーブル１３のデータ構成を示す図である。

【図６】改製処理部３の処理の流れを示すフローチャートである。

【図７】記載パターンテーブル１５のデータ構成を示す図である。

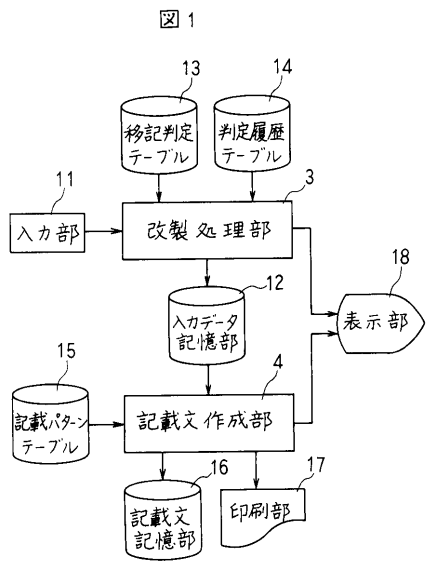
【図８】記載文作成部４の処理の流れを示すフローチャートである。

【符号の説明】

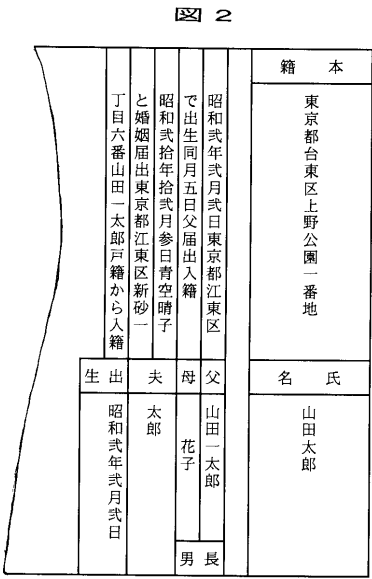
30

３：改製処理部、４：記載文作成部、１２：入力データ記憶部、１３：移記判定テーブル、１５：記載パターンテーブル

【図 1】



【図 2】



【図 3】

図 3

本籍氏名	東京都台東区上野公園一丁目 山田 太郎
戸籍事項転籍	【転籍日】昭和22年2月2日 【従前本籍】東京都江東区新砂一丁目6番 【送付を受けた日】昭和22年2月5日 【受理者】東京都江東区長
戸籍に記載されている者	【名】太郎 【生年月日】昭和2年2月2日【配偶者区分】父 【父】山田一太郎 【母】山田花子 【続柄】長男
身分事項出生	【出生日】昭和2年2月2日 【出生地】東京都江東区 【届出日】昭和2年2月5日 【届出人】父

【図 5】

図 5

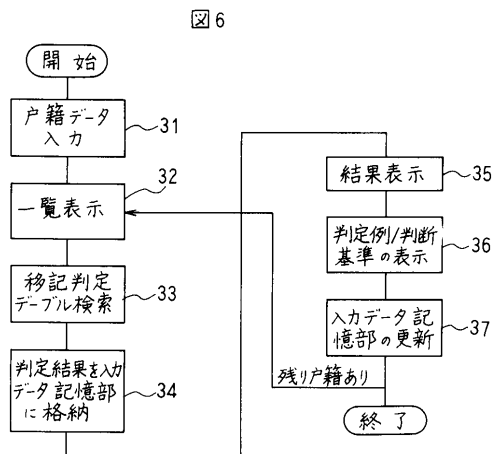
事件名	身分事項内容	移記処理区分	処理判断基準
認知	認知日, 認知氏名, ...	' Δ '	通常必要だが婚姻準正の場合不必要
認知	認知日, 被認知者氏名, ...	' 0 '	認知者の認知事項は移記不要
...	...	...	...
出生	出生日, 出生地, ...	' 1 '	出生子の出生事項は移記必要

【図 4】

図 4

個人番号	事件名	身分事項内容	移記処理区分
01	出生	出生日: A, 出生地: B, ...	' 1 '
01	婚姻	婚姻日: C, 配偶者: D, ...	' 1 '
...	...	...	...
03	出生	出生日: E, 出生地: F, ...	' 1 '
03	婚姻	婚姻日: G, 配偶者: H, ...	' 0 '
03	離婚	離婚日: I, 配偶者: H, ...	' 0 '

【図 6】



【図 7】

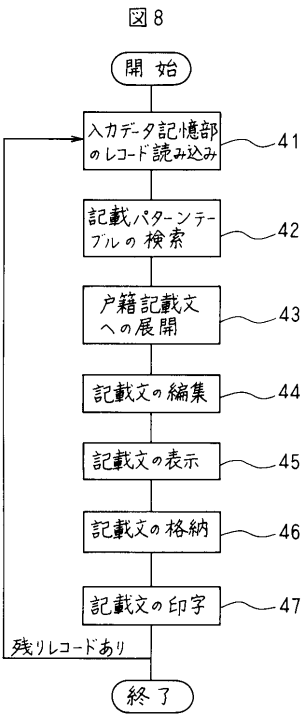
図 7

7 1

事件種別		出生					
パターン	身分事項名	出生日	出生地	届出日	届出人		
	特徴データ	で出生	届出入籍				
	記載パターン	出生日	出生地	で出生	届出日	届出人	届出入籍
1							
パターン	身分事項名	出生日	出生地	届出日	届出人	送付を受けた日	受理者
	特徴データ	で出生	届出	から送付入籍			
	記載パターン	出生日	出生地	で出生	届出日	届出人	届出
2		送付を受けた日 受理者 から送付入籍					

【図 8】

図 8



フロントページの続き

- (56)参考文献 特開平05-120269 (JP, A)
特開平07-225807 (JP, A)
特開平07-073188 (JP, A)

- (58)調査した分野(Int.Cl.⁷, DB名)
G06F 17/60 154